

Title	学力・性別による予備校に対する認識の差異：大手予備校のデータ分析より
Author	木村, 好美
Citation	人文研究. 55 巻 3 号, p.37-52.
Issue Date	2004-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	森田洋司教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

学力・性別による予備校に対する認識の差異

— 大手予備校のデータ分析より —

木村好美

1. 問題

2009年、あくまでも数のうえではあるが、大学進学希望者はどこかの大学に入学できるという「大学全入時代」が到来する。大学受験競争が大幅に緩和されることは1990年代から推測されており、高校生・高卒者を主要な対象とする予備校は1990年代半ばから存続そのものが危惧される存在であった。しかし2003年現在、同業者間での淘汰はあったものの予備校はまだ存続しており、既卒者のみならず高校に在学しながら予備校に通う生徒も存在している。実際に予備校に通った経験は無くとも、模擬試験の受験、大手予備校が実施するセンターリサーチ（大学入試センター試験の自己採点結果を集計、速報する）への参加などを含めると¹、大学進学希望者の多くは何らかの形で予備校とかかわったことがあるのではないだろうか。

大学受験競争が大幅に緩和されたにもかかわらず予備校が存続し続けている背景には、すばやく生徒のニーズにこたえる、業務内容の多角化（社会人対象の資格講座、専門学校の運営、中学生を対象としたコース設定、個人指導コースの開設、高校・大学への講師派遣、大学入試問題の作成など）を行うなどの予備校の企業努力はもとより、少子化に伴う保護者の子どもへの教育期待の高まりや、そして何よりも大学を受験する当事者である高校生・高卒生の要領よく受験に関する知識や情報を得たい、「入学したい大学」と「入学できる大学」はあくまでも別である、自分のレベルに合った授業を受けたいなどの様々な思いがあるだろう。

高等教育への進学率が40%を超えた現在、様々な学力レベルの生徒が進学を目指し大学受験競争に参加してゆく。予備校に通う生徒の学力レベルも様々で、彼らは自分の学力あるいは志望校のレベルに応じてクラスを選択し、受験勉強に励むことになる。このような状況下で受験対策という目的は同じでも生徒の学力レベルによって予備校や大学受験・大学受験勉強に対する認識に差異は生じないのだろうか。高校を卒業し「浪人生（本科生）」として予備校に在籍する場合は、単に「居場所」を求めて予備校に通っていることも考えられるが、大学受験競争が緩和され、一応学校という「居場所」があるにもかかわらず予備校に通う高校生のなかには、受験勉強以外の「何か」に魅かれて予備校に通う生徒が存在しないのだろうか。

そこで本稿においては予備校に通う生徒、特に学校に通いながら予備校にも通う高校生に注目し、全国型の大手予備校である河合塾で得たデータの分析を基に、「予備校に通う高校生」がどのように予備校を認識しているのか明らかにすることを目指す。特に性別や学力レベルに注目し、これらの要因によって予備校に対する認識に差異がみられるのか、さらには大学受験に対する認識にも差異は生じているのか検討する。

2. 予備校の機能

高校生の予備校に対する認識を分析する前に、まず、予備校の機能としてどのようなものが考えられるのかを確認しておこう。

予備校の機能に関しては、入試対策のための諸機能（成績向上、情報収集など）以外に、民間教育産業を問題視する言説にもしばしば見られる入試競争激化・序列化の促進など様々なものが考えられる。

現代の予備校の前身に当たるものが明治期から存在していたことは、関口義（関口，1974）や竹内洋（竹内，1991）らの研究によって示されており、入試問題の予想、名物講師の存在など現代の予備校との類似点も明らかになっている。しかし、現代の大手予備校のように全国展開を行っている予備校や、それに伴う情報収集力の拡大は当時の予備校にはみられない。

そこで本稿においては現代の予備校の特徴である情報機能について言及出来るよう、全国展開を行っている大手予備校を事例として取り上げ、予備校の機能について考察する。

2.1 先行研究による予備校の機能

現代の予備校の機能に関する研究はあまり多くは見られないが、それらの中における予備校の役割・特徴は次のとおりである。

- ① 試験が隠蔽する罫を明るみに出す（＝「試験は要領」）こと。
- ② 学校教育に安住している連中を出し抜く。
- ③ 受験技術ではなく、学問をパフォーマンスにして教えるところ（何らかのパフォーマンスを行って、興味を持たせながら暗記させ、それを思考力へと変えていく）。
- ④ 集団としての「先生」「生徒」がない。
- ⑤ 生活指導がない。
- ⑥ 高校を卒業し、大学入試に合格しなかった生徒が、勉強のため通うところ。

①②③⑥はいずれも大学の入学試験や勉強に関するもので、「予備校＝受験や勉強のためのもの」という見解である。④⑤は学校と比較した上で述べられる機能であり、どちらも「予備

校は学校ではない」ということ、つまり「生活教育は行わない」「勉強は学習塾、生活教育は学校」という役割分担を意味する。

2.2 予備校の標榜する機能

では、予備校自身は、自らをどのような機能を果たすところだと捉えているのだろうか。ここで、「御三家」と称されている河合塾・駿台予備学校・代々木ゼミナールの入学案内パンフレットから予備校が自らをどのように位置づけているのか整理してみよう。

優秀な講師・快適な学習環境・タイムリーな入試情報という3点が、どの予備校の入学案内パンフレットにおいても強調されているが、予備校の標榜する機能は次の4点に大別される。

- ① 教養機能＝受験テクニックの伝授ではなく、学問への興味・関心を喚起する機能。教養講座や、「興味のある分野をもっと勉強してみたい。受験勉強だけではものたりない人のため」（河合塾，2003）の特別セミナーなど。
- ② 受験対策機能＝受験テクニックの習得に関連する機能。「入試問題攻略の盲点・急所などが詰まった」テキスト（駿台予備学校，2003）、「受験界最強の講師」（代々木ゼミナール，2003）など。
- ③ サポート機能＝①②と異なり、授業内容・講師と関係のない、受験生をサポートする機能。「快適でゆとりのある学習環境」（代々木ゼミナール，2003）などの環境整備，チューター・学習アドバイザー制度，など。
- ④ 情報機能＝模擬試験，大学入試説明会，入試情報・大学情報提供など。

②③④の受験対策の機能に対し，①は唯一受験対策とは直接関係がない機能である。学問への興味・関心を喚起することによって，それまで無味乾燥に思えた勉強が楽しくなる，志望学部・学科が決まり勉強に熱心に取り組むようになる，という間接効果は考えられるが，①の教養機能はあくまでも「大学受験のため」ということを前面に出してはいない。

では，2.1.及び2.2.で見た予備校の機能は，実際に予備校に通っている高校生にはどのように認識されているのだろうか。また，性別や学力レベルによって予備校に対する認識は異なるのだろうか。本稿では，河合塾で得たデータの分析をもとにこれらを検証する。

3. データの概要

学校・予備校の両方に通う高校生がどのように予備校を認識しているかを知るために，2.で述べた「御三家」の1つである河合塾において調査を行った。

調査対象者は，河合塾の大阪府下にある校舎（大阪校・大阪南校）に通う高校2年生1655名

表1：調査データの概要

	男性	女性	不明	計
人数	551	408	4	963
%	57.2%	42.3%	0.5%	100%

である。高校3年生は受験を目前に控えているため受験に対する意識が他の学年に比べ高まるであろうし、高校1年生は入学して間がなく、高校生活体験が十分であるとは言えない。そのため、受験まである程度の期間があり、1年以上高校生活を体験している高校2年生を調査対象とした。

調査票は大阪校が1995年10月9日から10月14日及び10月17日、大阪南校が1995年11月6日から11月11日の期間に授業開始前に配布し、授業終了時に教室後方に設置した回収箱に回収した。配布票1548票、回収数は963票で回収率は62.2%であり、大阪府下にある河合塾高校2年生生の58.2%から回答を得たことになる(表1)。

4. 学力・性別による予備校に対する認識の差異に関する分析

4.1 分析に用いた変数

本稿では、2.1. および2.2.などを基に作成した予備校の機能に関する質問項目を分析する。分析に用いた質問項目及び2.1., 2.2.との対応は表3のとおりで、「1=そう思わない」「2=どちらかといえばそう思わない」「3=どちらかといえばそう思う」「4=そう思う」の4段階で回答を得た。

表2：性別・学力クラス別にみたサンプルの内訳

	上位クラス	下位クラス
男子	251 (30.9%)	222 (27.4%)
女子	181 (22.3%)	157 (19.4%)

さらに、学力レベル・性別による予備校認識の差異を明らかにするため、予備校の英語の在籍クラスをもとにサンプルを4つに区分した³⁾。その内訳は、表2のとおりである。

4.2. 予備校に対する認識と学校に対する認識

学校・予備校の両方に通うという「ダブルスクール」現象を鑑みると、学校との比較なしに高校生の予備校像が定まるとは考えにくい。これは、学習塾の研究⁴⁾や先行研究における予備校の機能が、学校を比較対象としている⁵⁾ことから明らかであろう。

このため、本稿では学力レベル・性別ごとの予備校に対する認識の分析に入る前に、予備校と学校に対する認識の相違を把握しておくことにしよう。ここでは、予備校と学校に対する認識の差異を知るため、各項目ごとに予備校と学校に対する認識の平均をとり、その差が有意な

表3：質問項目と予備校の機能との対応

質問項目	予備校の機能との対応	
1 受験のための勉強をするところ	勉強・受験	2.1.①②⑥ 2.2.②③
2 息抜きのできる場所	生活教育	2.1.④⑤
3 勉強への興味・関心を抱かせる場所	教養	2.2.①
4 社会の規則を身につける場所	生活教育	2.1.④⑤
5 個人の能力に適した指導を行う場所	勉強・受験	2.1.② 2.2.②
6 応用学力をつける場所	勉強・受験	2.1.①②③ 2.2.②
7 大学・大学入試に関する情報を得る場所	勉強・受験	2.1.①② 2.2.④
8 人間の幅を広げる場所	生活教育・教養	2.1.④⑤ 2.2.①
9 基礎学力をつける場所	勉強・受験	2.1.①②③ 2.2.④
10 知的好奇心を満たす場所	教養	2.2.①
11 大学へ進むために通わねばならぬ場所	勉強・受験	2.1.①② 2.2.②③④

ものであるか検定を行った。

予備校と学校に対する認識の平均及び平均の差の検定結果は表4のとおりで、質問項目の1から11すべてにおいて1%水準で有意であった。表4の結果と、2.で述べた予備校の機能との対応を検討しよう。

まず勉強・大学受験に関する機能について見ると、「1. 受験のための勉強をする」「5. 個人の能力に適した指導を行う」「6. 応用学力をつける」「7. 入試情報を得る」で予備校が高く、「9. 基礎学力をつける」「11. 大学へ進むために通わねばならぬ」で学校が高いことから、受験テクニック・受験情報を求めて予備校に通う高校生の姿が浮かび上がる。彼らは、学校は基礎学力では予備校に勝るものの、「受験テクニック・受験情報・応用学力は、学校より予備校」と捉えているのである。このことから、2.1.①②③⑥および2.2.②③④は予備校に通う高校生の認識と合致すると言えるだろう。2.2.①、予備校が標榜する「教養機能」については、「3. 勉強への興味・関心を抱かせる」「10. 知的好奇心を満たす」という項目において、予備校の値が学校よりも高いため、予備校の標榜する「教養機能」は、ある程度生徒に認識されていると見做しても問題はないと考えられる。また、「2. 息抜きのできる」「4. 社会の規則を身につける」「8. 人間の幅を広げる」という社会性育成・人間形成に関連する生活教育項目はすべて予備校よりも学校の方が高いことから、2.1.④⑤「予備校は生活教育は行わない」ということは、予備校に通う

表4：学校と予備校の機能に対する平均の差の検定結果

質問項目	学校	予備校	t 値	有意確率
1 受験のための勉強をするところ	2.45	3.76	-35.53	0.00
2 息抜きのできる場所	2.47	1.65	21.12	0.00
3 勉強への興味・関心を抱かせる	2.47	2.85	-9.67	0.00
4 社会の規則を身につけるところ	3.01	1.70	32.29	0.00
5 個人の能力に適した指導を行う	2.29	2.65	-8.04	0.00
6 応用学力をつける場所	2.32	3.50	-29.41	0.00
7 大学・大学入試に関する情報を得る	2.56	3.67	-30.27	0.00
8 人間の幅を広げるところ	3.21	2.08	27.42	0.00
9 基礎学力をつける場所	3.32	2.60	17.30	0.00
10 知的好奇心を満たすところ	2.53	2.69	-4.12	0.00
11 大学へ進むために通わねばならぬ	3.26	2.92	7.53	0.00

高校生にも認識されていると言える。

以上を要約すると、学校・予備校の両方に通う高校生にとって、学校は生活教育および基礎学力を育成する場であると認識されていると言える。

これに対して予備校は、勉強・受験対策に教養的要素が加わったもので、生活教育は行わない場である、と認識されていることになる。ただし、「8. 人間の幅を広げるところ」で予備校の値は低いことから、教養機能は「人間の幅を広げる」に至るような教養ではなく、あくまでも知的なものに限定されていると考えられる。

4.3. 学力・性別による予備校認識の差異

—分散分析の結果より—

4.2.で明らかになった予備校に対する認識は、学力・性別にかかわらず同じなのだろうか。学力によって学校体験が異なるということが久富善之によって指摘されているが(久富, 1993)、これと同様に予備校認識に対しても学力による差が見られるのではないか。この学力による差を明らかにすることが本稿の課題であるが、本稿では学力だけでなく性別による差もあわせて検討することにしよう。

予備校への認識に対し、性別・学力レベルによる差異が見られるのかということを検討するため、性別・学力レベル別の4グループ(表2参照)の予備校認識に有意な差がみられるのかを分散分析によって明らかにした。分散分析の結果は表5のとおりであり、有意な差が確認されたのは「3. 勉強への興味・関心を抱かせる場所」「6. 応用学力をつける場所」「7. 大学・大学入試に関する情報を得るところ」「8. 人間の幅を広げるところ」「9. 基礎学力をつける場所」「10. 知的好奇心を満たす場所」「11. 大学へ進むために通わねばならぬ場所」の7項目であった。

表5：性別・学力ごとの分散分析結果

項目	男子・上位	男子・下位	女子・上位	女子・下位
1 受験のための勉強をすところ	3.79	3.73	3.79	3.77 F値 0.60
2 息抜きのできるすところ	1.62	1.62	1.75	1.60 F値 1.31
3 勉強への興味・関心を抱かせるすところ	2.77	2.83	2.95	3.00 F値 2.63 *
4 社会の規則を身につけるとすところ	1.61	1.71	1.75	1.83 F値 2.54
5 個人の能力に適した指導を行うすところ	2.63	2.56	2.78	2.80 F値 2.34
6 応用学力をつけるすところ	3.50	3.40	3.55	3.65 F値 3.99 **
7 大学・大学入試に関する情報を得るとすところ	3.65	3.62	3.77	3.78 F値 3.47 **
8 人間の幅を広げるとすところ	1.89	2.17	2.13	2.22 F値 5.45 **
9 基礎学力をつけるすところ	2.50	2.72	2.45	2.81 F値 6.38 **
10 知的好奇心を満たすとすところ	2.62	2.56	2.94	2.75 F値 5.86 **
11 大学へ進むために通わねばならぬすところ	2.75	2.99	3.03	3.08 F値 4.04

注) 有意水準：* $p<0.05$ ** $p<0.01$

この有意な差が確認された7項目について、予備校の機能別に分析結果を解釈しよう。

勉強・受験の項目

「9. 基礎学力をつけるすところ」では成績上位クラスよりも成績下位クラスの方が値が大きい。つまり、成績下位クラスの生徒は予備校を「基礎学力をつけるすところ」としてより強く認識しているのだ。学力レベルの低い生徒は、基礎学力の育成を予備校に求めているように見えるが、「6. 応用学力をつけるすところ」の結果を参照すると必ずしもそうとは言えない。なぜなら、平均値では4グループとも「9. 基礎学力をつけるすところ」よりも「6. 応用学力をつけるすところ」の方が値が大きく、「6. 応用学力をつけるすところ」という項目において最も値の大きいのは女子の成績下位クラスだからである。

これらのことより「基礎学力」について解釈を深めるためには、予備校の所属クラス以外に在学高校の影響も考慮しなければならないと言える。例えば、進学する者が稀な高校に在学している生徒は、学校の授業だけでは不安で基礎学力から応用学力の育成まで予備校に求める傾向が生じるなどの現象が起こると考えられるためである。

しかしながら、平均値では4グループとも「9.基礎学力をつけるところ」よりも「6.応用学力をつけるところ」の方が高いこと、4.2.において「9.基礎学力をつけるところ」としては学校の方が認識が高かったことを考慮すると、予備校は「基礎学力」よりも「応用学力」を育成する場として認識されているが、学力レベルの低い生徒は「基礎学力」育成に対する認識も高いと要約することができるだろう。

次に「7.入試情報を得るところ」であるが、この項目は学力レベルにかかわらず女子の方が高い値を示すことから、女子の方が予備校を「入試情報を得るところ」として強く認識していることになり、性別による差が確認できる。

「11.大学進学のために通わねばならぬ」という必要性の項目では、男子の成績上位クラスが他のグループよりも低い値を示している。そもそも成績が良ければ予備校に通う必要はないであろうから当然の結果かもしれないが、同じ成績上位クラスでも女子は高い値を示しており、学力・性別両方の差が見られる。

生活教育の項目

「8.人間の幅を広げるところ」においては男子の成績上位クラスの値が最も低く、他のグループとの差が大きい。ここでも、学力・性別両方の差が見受けられる。

教養の項目

教養的機能に該当する「3.勉強への興味・関心を抱かせる」「10.知的好奇心を満たす」は、男子よりも女子の方が高い値であり、女子の方が予備校の教養的な機能を強く認識している。

—クラスター分析の結果より—

4.3.では、予備校への認識を個々の項目ごとに検討した。ここでは項目ごとではなく項目間の関係を、クラスター分析と多次元尺度構成法を用いて把握する。

クラスター分析と多次元尺度構成法の分析結果は、図1から図4のとおりである。なお、図1から図4は多次元尺度構成法によって得られた布置の中に、クラスター分析によって得られたデンドログラムを表現したものである⁴⁾。

4つのグループすべてが、大きく2つのクラスターに分かれる。小さい方のクラスターは、「2.息抜きができる」「4.社会の規則を身につける」「8.人間の幅を広げる」という社会性育成・人間形成に関する項目によって構成されていることから、「生活教育のクラスター」と見做すことができる。

もう1つの大きい方のクラスターは、「1.受験のための勉強をする」「3.勉強への興味を抱かせる」「5.能力に適した指導を行う」「6.応用学力をつける」「7.入試に関する情報を得る」「9.基礎学力をつける」「10.知的好奇心を満たす」「11.進学のため通わねばならぬ」という、受験

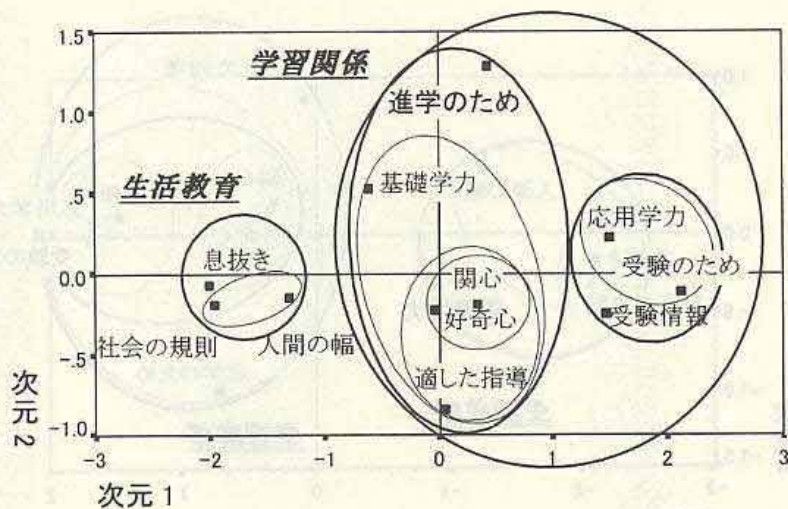


図1：男子・成績上位クラス

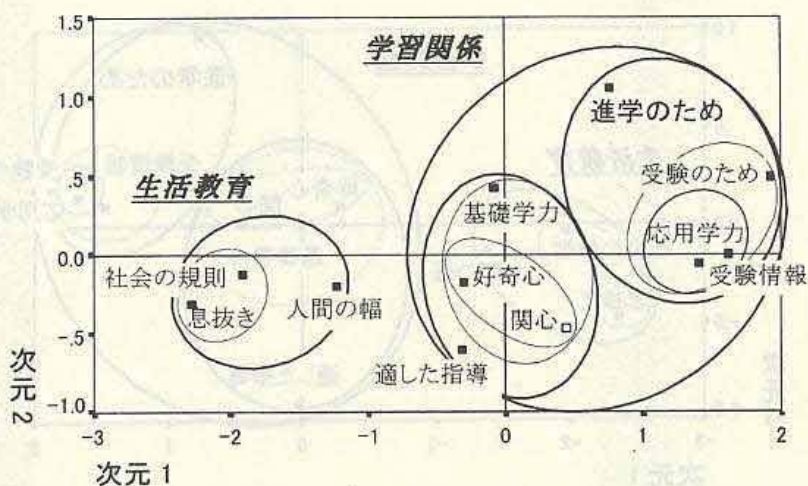


図2：男子・成績下位クラス

対策、学力育成及び教養機能的な項目から構成されているため、このクラスターは「学習関係クラスター」と考えられる。

つまり、予備校に通う高校生は予備校の持つ「生活教育の機能」を重視するグループと、「学習関係の機能」を重視するグループに大別されるということである。以下で、性別・学力レベルごとに結果を解釈してゆこう。

成績上位クラス・男子

成績上位クラスの男子について、生活教育クラスターは「2. 息抜きができる」「4. 社会の規則を身につける」「8. 人間の幅を広げる」から成っており、後に解釈する成績下位クラスのグループと構造が同じである。

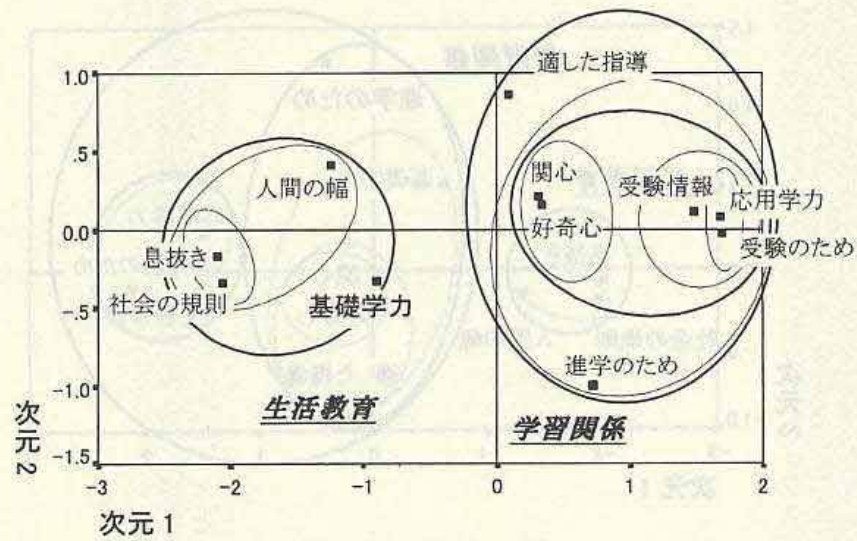


図3：女子・成績上位クラス

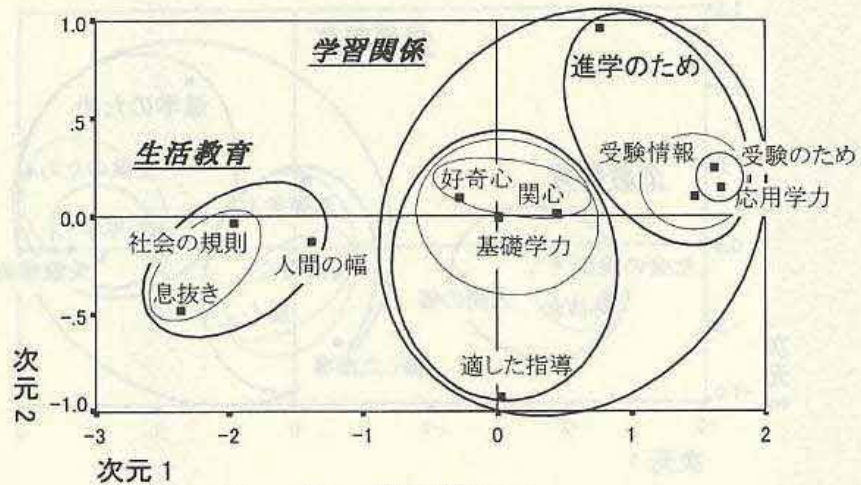


図4：女子・成績下位クラス

これに対し、8項目から成る学習関係クラスターは2つの大きなクラスター、すなわち「1. 受験のための勉強をする」「7. 入試に関する情報を得る」という受験に関する項目および「6. 応用学力をつける」から成るクラスターと、教養の項目および「5. 能力に適した指導を行う」「9. 基礎学力をつける」「11. 進学のため通わねばならぬ」から成るクラスターから構成されている。つまり、学習関係を重視するグループの中にさらに「受験に対する機能」を重視するグループと「教養その他学習関係」を重視するグループが存在しているということである。

このうち受験に関する項目と「6. 応用学力をつける」から成るクラスターを、「受験対策クラスター」と呼ぼう。受験に関する項目と「6. 応用学力をつける」が1つのクラスターを成すことから、受験を重視する生徒は応用学力も重視することが分かる。

もう1つのクラスター、すなわち、教養項目と「5. 能力に適した指導を行う」「9. 基礎学力

をつける」「11. 進学のため通わねばならぬ」から成るクラスターは、学力レベルによってその構造の差が顕著に示される。成績上位クラスの男子は知的な興味・関心、個人の能力に適した指導、基礎学力をつけるという項目が進学のために必要という項目と結合する。さらに、受験対策クラスターと教養項目から成るクラスターはかなり遅い段階でないと結合しない。

成績上位クラス・女子

女子の成績上位クラスで注目すべき点は、「生活教育クラスター」に「9. 基礎学力をつける」が含まれることである。つまり、成績上位クラスの女子のうち「生活教育の機能」を重視するグループは「基礎学力をつける」ことも重視しているのである。

さらに「学習関係クラスター」においても、成績上位クラスの女子は他のグループと大きく異なる。受験に関する項目と「6. 応用学力をつける」から成るクラスターより「受験対策クラスター」が構成される点は他のグループと同じであるが、成績上位クラスの女子のみ受験対策クラスターが「3. 勉強への興味を抱かせる」「10. 知的好奇心を満たす」という教養的な項目と早い段階で結合する。このため、成績上位クラスの女子の「学習関係クラスター」は、受験対策と教養の結合した「総合的な学力育成クラスター」であることが分かる。

成績下位クラス

成績下位クラスに関しては、性別による大きな差は見受けられない。そのため、男女に分けず、分析結果の解釈を行う。

成績下位クラスの生徒の予備校に対する認識構造は、成績上位クラスの男子とよく似ている。第一に生活教育クラスターが、「2. 息抜きができる」「4. 社会の規則を身につける」「8. 人間の幅を広げる」から成っているという点と同じであるし、学習関係クラスターが8項目から成る点や、受験対策クラスターと教養項目から成るクラスターがかなり遅い段階でないと結合しない点も同じである。

このように、男子の成績上位クラスと成績下位クラスは一見同じクラスターを構成しているように見えるが、成績下位クラスの生徒は「受験対策クラスター」に「11. 進学のため通わねばならぬ」という項目が加わる点において、男子の成績上位クラスと大きく異なる。

「進学のために通わねばならぬ」という項目が教養項目から成るクラスターに含まれるのか、それとも受験対策クラスターに含まれるのかでは、予備校、ひいては「受験」に対する認識構造は全く異なるものになると考えられる。多次元尺度構成法もクラスター分析も、項目同士の距離を知るための分析手法である。男子の成績上位クラスの場合、「進学のため通わねばならぬ」という項目は教養項目などと距離の近い項目であり、教養項目を重視する生徒は「進学のため通わねばならぬ」という項目も重視していることが分かる。ここから「進学」ということを知的な興味・関心や個人の能力、基礎学力と関連づけて認識していることが分かる。つまり、

成績上位クラスの男子は予備校を「生活教育の機能」を重視するグループ、手段的に「受験に関する機能」のみを重視するグループ、知的な興味・関心、個人の能力に適した指導、基礎学力をつける、進学のために必要という項目を合わせた「教養その他の学習関係」を重視するグループに分かれるのである。

これに対し、成績下位クラスの生徒は、「進学のため通わねばならぬ」という項目と受験対策クラスターとの距離が近いことから、「受験対策の機能」を重視するグループは「進学のため通わねばならぬ」という項目も重視することになり、成績上位クラスの生徒に比べ、「進学のため」ということを手段的な「受験対策」という枠組みの中でしか捉えていないと考えられる。

5. 結論

本稿は性別や学力レベルに注目し、「予備校に通う高校生」がどのように予備校を認識しているのか検討してきた。ここで、本稿におけるデータ分析の結果明らかになったことを整理しておこう。

- (1) 性別・学力レベルにより、予備校に対する認識は異なる。

t検定および分散分析の結果より、学力レベルでは成績下位クラスの生徒が予備校を基礎学力育成の場として強く認識する傾向があると考えられる。性別では男子よりも女子の方が受験対策以外の教養的な機能を強く認識する傾向がある一方、成績上位クラスの男子は「3. 勉強への興味・関心を抱かせる」「10. 知的好奇心を満たす」「8. 人間の幅を広げるところ」という項目において一貫して低い評価を下しているため、予備校を冷めた目で眺めている集団だと考えることができる。

- (2) クラスター分析および多次元尺度構成法より、予備校に対する認識は「生活教育に関するクラスター」と「学習関係クラスター」に大別される。つまり、「生活教育の機能」を重視するグループと、「学習関係の機能」を重視するグループに大きく分かれるのである。成績上位クラスの女子の「学習関係クラスター」は、受験対策と教養の結合した「総合的な学力育成クラスター」であるのに対し、成績上位クラスの男子生徒や成績下位クラスの生徒は「学習関係クラスター」の中にさらに「受験に対する機能」を重視するグループと「教養その他学習関係」を重視するグループが存在する。なかでも成績下位クラスは「11. 進学のために通わねばならぬ」という項目が「受験に対する機能」を重視するグループに含まれるため、「進学する」という行為を「受験」という枠組みの中でしか捉えていないと考えられる。

上述した分析結果を踏まえ、予備校・高校の差異、予備校の限界、学校独自の機能についてまとめておく。

4.2. より、学校・予備校の両方に通う高校生は、学校を生活教育及び基礎学力を育成する場、予備校を勉強・受験対策と教養を供給する場としてより強く認識していることが明らかになった。教養という要素で予備校の平均値が学校を上回ること、女子は予備校の教養機能を強く認識していることから、予備校は知的なものに限定されてはいるが、単なる受験勉強以上のものを提供している—換言すると、予備校の提供し得るものは「知的なもの」に限定されており、ここに1995年時点での予備校の限界と、予備校・高校の差異、学校独自の機能が集約されていると考えられる。

今回の分析で得られた性別・学力による予備校の認識差異のうち、最も重要な問題は、成績下位クラスの生徒が「進学する」という行為を「受験」という枠組みの中でしか捉えていないということである。本来、高等教育機関への「進学」という行為は、学びたいことや自分なりの学問への興味・関心があってこそ成立するものだろう。「大学入試」はあくまでも大学入学後の勉強に必要な学力や思考力を測るための通過儀礼にすぎず、「進学」の動機づけとなる学問への興味・関心との間にはある程度の距離が存在するはずである。それゆえ「進学のために通わねばならぬ」という項目は、教養項目や「基礎学力をつけるところ」という項目と距離の近い項目であって然るべきだろう。それにもかかわらず、「進学のために通わねばならぬ」という項目が学習関係クラスターから離れ、手段的な受験対策クラスターに含まれるということは、成績下位クラスに在籍する生徒においては「進学」という行為と、その動機づけとなる基礎的素養の乖離が起こっている、つまり予備校通いは「受験」に対する意識を肥大させ、その結果「進学」を「受験」という枠組みでしか捉えなくなる、あるいはそのような傾向を助長する危険性を孕んでいると解釈することが可能である。

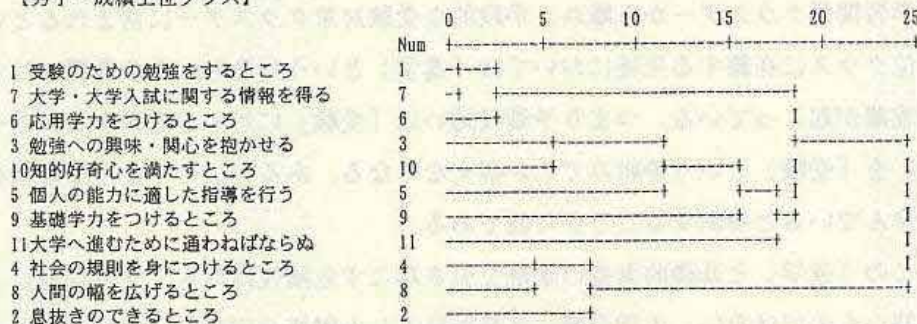
しかし、この「進学」と基礎的素養の乖離を引き起こす危険性は何も「予備校通い」という行為のみが持つものではない。大学受験に必要な科目しか履修せず卒業可能な高校やそれに賛同する保護者、大学で何を学びたいのか、そのためにはどの学部・どの大学に進学すればいいのか、という進路指導を行わない高校や保護者も同様に、あるいは「予備校通い」という行為以上にこの危険性を孕んでいるのである。

現代の高校生に関する研究では、在籍高校の影響を検証しているものが見られるが（尾嶋、2001・友枝、2003など）、本稿においては在籍高校別の分析を行っておらず、また調査票に保護者の階層要因についての質問項目を記載することが不可能であったため保護者の階層要因について検討することが出来なかった。データの古さという問題もあるため、今後これらの要因を加えて新たにデータを収集し、さらに詳細に分析を行っていくことが必要であろう。

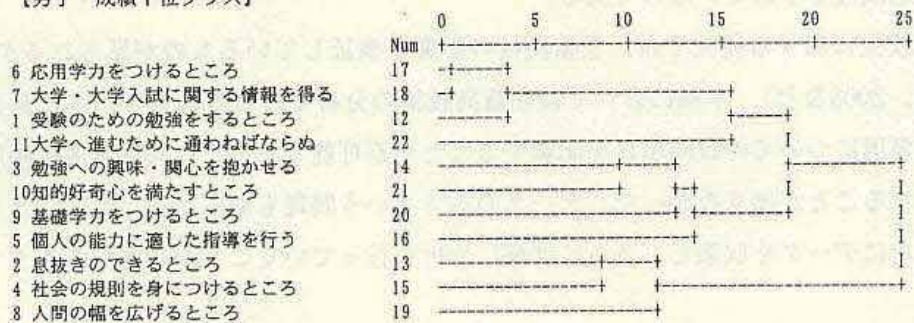
註

- 1 2003年のセンターリサーチ回収数は、センター試験本試験受験者55万5474人に対して河合塾41万4271人(75%)、駿台予備学校41万8113人(75%)、代々木ゼミナール44万5165人(80%)である。
- 2 ①については(竹内, 1991)を、②③④⑤については(樋口, 1997)、⑥については(Mamoru Tsukada, 1991)を参照のこと。
- 3 成績上位クラスは英語のクラスにおいて河合塾エンリッチ・Ga・Gbクラス在籍者、成績下位クラスは河合塾Sa・Sb・Syクラス在籍者とした。なお、河合塾エンリッチ・Ga・Gbクラス在籍者は、難関国私立大学に進学を希望する生徒を対象としたクラスであり、一定以上の成績でないと入学を許可されない。英語の成績を基準としたのは、大学入試の多くにおいて英語は文系・理系双方において必須科目となっているからである。
- 4 (久富, 1993)・(結城 忠, 1987)などを参照のこと。
- 5 (樋口, 1997)・(Mamoru Tsukada, 1991)・(佐伯, 1997)などを参照のこと。
- 6 多次元尺度構成法はクルスカル法で、類似性の指標としてユークリッド距離を用いた。多次元尺度構成法のストレスは、男子上位クラスが0.05、男子下位クラスが0.04、女子上位クラスが0.06、女子下位クラスが0.03である。
 クラスタ分析は、類似性の指標としてユークリッド距離を用いた。クラスタ分析のデンドログラムは以下の図のとおりである。

【男子・成績上位クラス】



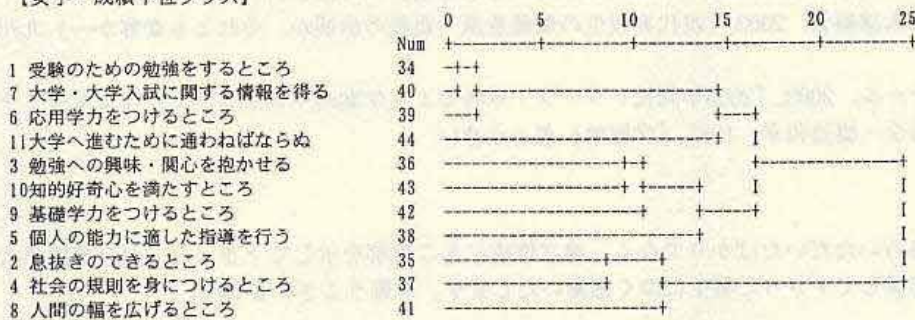
【男子・成績下位クラス】



【女子・成績上位クラス】



【女子・成績下位クラス】



引用・参考文献

- 天野郁夫, 1996, 『日本の教育システム』 東京大学出版会
- 藤田英典, 1991, 『子ども・学校・社会—「豊かさ」のアイロニーのなかで—』 東京大学出版会
- 藤田英典, 1997, 『教育改革—共生時代の学校づくり—』 岩波書店
- 樋口裕一, 1997, 『予備校はなぜおもしろい』 日本エディターズスクール
- 市川昭午, 1995, 『学校教育の多様化・弾力化を進めるための外部教育セクターとの連携・協力に関する研究』 文部省科研費総合研究 (A) 研究成果報告書
- 荻谷剛彦, 1995, 『大衆教育社会のゆくえ』 中央公論新社
- 荻谷剛彦, 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』 有信堂高文社
- 門脇厚司・陣内靖彦編, 1992, 『高校教育の社会学—教育を蝕む〈見えざるメカニズム〉の解明—』 東信堂
- 河合塾, 2003, 『2003年高校グリーンコース入学案内パンフレット』 河合塾
- 木村好美, 1995, 『現代社会における予備校の機能—学校と予備校の関係を軸として—』 奈良女子大学大学院 文学研究科 教育学専攻修士論文
- 木村好美, 1997, 『予備校の機能分化と学力』 日本教育学会 第49回大会発表要旨および当日配布資料
- 木村好美, 1998, 『高校生におけるダブル・スクール現象—予備校通いが高校生に及ぼす影響—』 日本教育学会 第50回大会発表要旨および当日配布資料
- 木村好美, 1999, 『予備校の社会史—予備校の“全国展開”がもたらしたもの—』 奈良女子大学文学部教育文化情報学講座年報 山田昇教授定年退官記念号, 83-93頁, 奈良女子大学文学部教育文化情報学講座
- 小宮山博仁, 1993, 『学歴社会と塾—脱受験戦争のすすめ—』 新評論
- 久富善之, 1993, 『競争の教育』 労働旬報社
- Mamoru Tsukada, 1991, *Yobiko Life: A Study of the Legitimation Process of Social Stratification in Japan*. Berkeley: Institute of East Asian Studies University of California.

- 中井浩一 編, 2003, 『論争・学力崩壊2003』中央公論新社
- NHK 放送文化研究所編, 2003, 『中学生・高校生の生活と意識調査—新しい今と不確かな未来—』NHK 出版
- 尾嶋史章, 1997, 「誰が教育に支出するのか」『大阪経大論集』第48巻第3号, 311-327頁, 大阪経済大学
- 尾嶋史章編著, 2001, 『現代高校生の計量社会学—進路・生活・世代—』ミネルヴァ書房
- 岡太彬訓・今泉忠, 1994, 『パソコン多次元尺度構成法』共立出版株式会社
- 佐伯胖, 1997, 「子どもが熱くなるもう一つの教室—塾と予備校の学びの実態—」岩波書店
- 佐藤俊樹, 2000, 『不平等社会日本』中央公論新社
- 関口義, 1974, 「わが国に於ける予備校の発達過程とその展望」『天王寺予備校二十年史』天王寺学館
- 駿台予備学校, 2003, 『2003年高校生クラス入学案内パンフレット』駿台予備学校
- 柳ヶ瀬孝三・三上和夫編, 1986, 『教育費を見直す』大月書店
- 竹内洋, 1991, 『立志・苦学・出世』講談社
- 轟亮, 1995, 「学校週五日制に関する母親の意見の形成基盤」『年報人間科学』第16号
- 友枝敏雄・鈴木讓編著, 2003, 『現代高校生の規範意識—規範の崩壊か, それとも変容か—』九州大学出版会
- 代々木ゼミナール, 2003, 『2003年高校グリーン・単科ゼミ入学案内パンフレット』代々木ゼミナール
- 結城忠・佐藤全・橋迫和幸, 1987, 『学習塾』ぎょうせい

謝 辞

調査にご協力いただいたばかりでなく, 論文作成にもご理解を示して下さいました, 河合塾関係者の方々および調査に回答して下さいました塾生に深く感謝いたします。有難うございました。